

八重山諸島の伝統芸能

子どもたちがまちおこしを支える

沖縄キリスト教短期大学助教授 大山伸子

沖縄県出身のミュージシャンがオリコンの上位ランキングに名を連ね、Jポップスをにぎやかにしている。ORANGE RANGE、夏川りみ、BEGIN、DA PUMP、安室奈美恵らの活躍は目覚ましいものがあり、このところ特に、夏川りみ、BEGINなどの音楽に、熱い共感が寄せられているようだ。彼らには生まれ育った八重山の民謡とその音楽環境が底流にあり、独自の音楽的感性を作り上げているように思う。最近ではノーズウォーターズ、やなわらばー、池田卓らが台頭、彼らに続くことになるだろう。

芸能の宝庫といわれる沖縄の中でも、とりわけ八重山諸島には、

島のそこそこに地域の伝統文化や音楽が脈々と息づいている。日常生活に密着したかたちで人々と伝統芸能、子どもと地域行事が結びつき、伝統文化を継承している。ふつう、〝まちおこし〟というとすぐ、経済効果を取りざたされるのだが、〝まち〟が維持され続けていくことが、まず〝まちおこし〟の基本なのである。人々の居住空間を維持すべく伝統文化があり、継承されるべき共同体の精神性が要請されるわけで、それこそが〝まちおこし〟の原動力といえないだろうか？

世代を繋ぐ、地域の芸能の日常性を見つめることで、音楽文化と

〝まちおこし〟について、私の故郷でもある八重山の音楽文化を考えたい。

八重山諸島と伝統行事

沖縄県八重山諸島は日本の最南端に位置し、大小三十一の島々からなる。そのうち有人島は、教育・文化、政治・経済、交通の中心地となる石垣島(一島一市)を主島として、竹富町所轄の竹富、黒島、小浜、鳩間、新城、西表、波照間、そして、与那国町所轄の与那国島(二島一町)の九島があり、その総人口は平成十七年一月末日現在、

五二、三八七人である。(1)

沖縄県の主島である沖縄本島と、

八重山諸島との距離は、例えば県庁所在地の那覇市を地図上で東京都に置き重ねてみると、石垣島は和歌山県境に位置し、日本の最西端の与那国島(台湾との距離約一二km)は、おおよそ香川県に位置する。(2)

沖縄県の文化圏は通常、沖縄本島、宮古島、八重山諸島に三区区分されるが、八重山諸島の芸能は、〈ユンタ〉、〈ジラバ〉(3)に代表されるように、祭事や農作業から生まれ伝承されてきたものが多い。また、八重山の各地域で行なわれている伝統行事のほとんどは、豊稔祈願や収穫儀礼、先祖祈願(供養)であり、通常、旧暦で行なわれている。八重山は詩の国、歌の国といわれ、さまざま地域行事の中で伝統芸能が継承され、生活に呼応して息づいている。

代表的な行事には、〈豊年祭(プーリイ)〉、〈結願祭(キツイガン)〉、〈海神祭(ハーリー)〉、〈獅子舞〉、〈弥勒(ミルク)〉、〈節祭(シツイ)〉、〈アンガマ〉、〈十六日祭(ジユールクニツ)〉など各地域ごとに



「盆アングマ」木製の仮面を被り来世からやって来た笑いを誘う〈ンミー〉

行なわれる祭事や、竹富島の〈種取祭（タニドゥリ）〉、鳩間島の〈カムラーマ〉、波照間島の〈ムシヤーマ〉、石垣島・川平の〈マユンガナシ〉、西表島・古見（他数か所）の〈アカマタ・クロマタ〉のように、その地域でしか見られない祭事が

ある。また、石垣市の取り組みとして、八重山を代表する民謡〈トゥバラーム〉を、「とうばらーま大会」としてイベント化し、旧暦の九月十五日（十五夜）に、地元のみならず、全国から多くの人々が参加し

て歌唱力や、新作々詞を競う大会も開催されている。竹富町役場主催では、西表島の伝統的な教訓歌〈デンサ節〉大会が、与那国町役場主催では、与那国民謡〈ドゥナンスンカニ〉大会が毎年開催され、他に八重山古典音楽の歌唱力、演奏力を競う大きな年間コンクールがあり、小・中学生から七十〜八十歳代まで幅広く参加する人気イベントとなっている。

さらに、八重山諸島外から移り住んでいる人々も多く、従来の文化圏外の伝統行事も育まれてきている。例えば、台湾から移住した人々による〈豚祭り〉や、宮古島出身者の多い村落では、宮古島の伝統芸能〈タイチャー〉の継承が盛んである。古来、伝承されている八重山諸島の伝統芸能に、他の文化圏の伝統行事や文化、芸能が加わることで、より多彩になっているのである。

伝統行事と子どもの参加形態

最近では、八重山の大きなイベントとして、石垣市主催の「トラ

イアスロン」があり、国内外から参加者も増えて地域性を越えるものが、定番化を果たしている。

その一方で、地域で古くから継承されている五穀豊穡や先祖崇拝といった伝統行事は、子どもから高齢者にいたるまで地域単位、家族単位の共同体意識で行われている。

五穀豊穡は、御願所（ウガンジヨ）と呼ばれる信仰の場を中心に行われる、地域ぐるみの行事であり、先祖崇拝は、ご先祖を祀った仏壇やお墓の場を中心に行われる、家族や親族単位の行事である。

地域の伝統芸能には、祖先供養の祭事に直接参加する形態があり、代表的なものに〈アングマ〉、〈十六日祭〉がある。また、祭事の総まとめ的な行事として〈結願祭〉があるが、生活に根ざしたこれらの地域行事に、子どもたちはどのように関わっているのだろうか。

① 〈アングマ〉

〈アングマ〉は旧暦の七月十三日〜十五日の旧盆に随伴、沖縄県

の他地域では見られない、八重山諸島のみで行われる独特の芸能である。

〈アンガマ〉には、〈盆アンガマ〉と〈節(シツイ)アンガマ〉があるが、〈盆アンガマ〉は先祖を供養するためのもので八重山諸島の各地で行われている。〈節アンガマ〉は豊稷を招来するためのもので、西表島西部などごく限られた地域に伝承され、〈盆アンガマ〉とは性格が異なる。

〈盆アンガマ〉は、旧盆の三日間の夜に、家々に出向き、念仏や先祖に奉納芸能をする行事である。木製の仮面を被った爺(ウシユマイ)と婆(シミ)の二人を主役に、顔を布で覆った、太鼓、笛、踊りの演者が(子や孫という設定)、念仏謡や歌、踊りを家々の仏前に奉納する仮装集団である(前頁写真)。彼らは来世からの訪問者であるため、素顔を見せないという意味の仮装なのだ。

きわめて特徴的なことは、ウシユマイとシミが裏声を発し、見物にきた人々と珍問答を行う所作

である。その問答は、地域や家庭の身近な話題から世界のリアルタイムトピックスまで内容は幅広く、その問いにウシユマイとシミが、即興的にウイットに富んだ即答で人々を笑いに包む。いわゆる、来世と現世が時空を超越して同次元でコミュニケーションを図り、音楽を共有する場なのである。

〈盆アンガマ〉の演目は、念仏謡や歌、踊りがあり、「無念佛節」のようにお盆にのみ歌われる音曲や、「孝敬口説」のように歌詞の内容が親孝行の大切さを歌った教訓歌、また、「胡蝶の舞」「安里屋ユンタ」など、オーソドックスな八重山民謡を七、八曲披露する。この独特の仮装集団は、その地域に住む二〜三歳から八十歳代までの約十〜二十名で構成され、参加する幼児や小・中・高校生は、近隣の大人や熟達者から、歌、踊り、狂言(キョウギン、コントの意)の指導を受けて本番に臨む。子どもたちが、郷土の芸能を耳目に触れ体験することで、次の世代に継承されていくのである。

この行事は、主に字会あざかいの青年団が企画運営し、礼金を青年会の活動資金に充てているが、戦後の一時期、〈盆アンガマ〉は下火になった危機を乗り越えて今日に至っている。

② 十六日祭(ジュールクニツ)

十六日祭は、旧暦の一月十六日に行う後生(テソ)、来世の意のお正月行事である。沖縄本島の一部地域にも見られるが、宮古島と八重山諸島では重要な行事として認識されている。その日は、八重山の島外で暮らす人たちも故郷へ帰り、曾祖父母から曾孫まで集い、家族や親族と共に墓前で祝宴をあげて祖先を供養する。当日は、八重山全域の小・中・高校が休校(午後から)で、島全体で祝う地域に根ざした祭日となっている。

十六日祭では、家族や親族が墓前に参集し、重箱に正月料理を彩りあざやかに詰め、餅、菓子、酒、果物、花なども供え、歌や三線で音楽を奏でて踊り、賑々しく酒宴を繰り広げる。子どもたちも

ふだん着のまま伝統芸能を演じ、踊りや太鼓、三線を見事に表現する(次頁写真)。演じることは子どもたちにとって、特別なことではなく、ごく自然な日常の振るまいなのである。しかし、それは、すべての子どもに当てはまることではなく、家庭や地域の環境に大きく左右されるといえるだろう。

以前は、正月風景の一つである手作りピキター(風の一種)を揚げていたこともあり、子どもの遊び場としての役割を担っていたが、現在は、歌、三線の生演奏ともども、その習慣は徐々に簡素化されている。

十六日祭で演奏される演目は、「鷺の鳥節」「赤馬節」など、正月や結婚式、成年祝いなどの慶事に幕開けで用いられる祝歌にはじまり、「めでたい節」「鳩間節」など、テンポの速いポピュラーな八重山民謡を折り込んでいる。また、「トウバラマ」のように、高い歌唱力が要求される難曲を演奏することもあり、選曲に特別な決まりはないようだ。



「十六日祭」来世のお正月。親族が墓前に参集し、祝膳や歌、三線、踊りで祖先を供養する

十六日祭の音楽は、奉納や死者を慰めるという意味合いもあるが、来世と現世が共に喜びを分かち語り合い、家族や親族の絆を深めるという精神性が大きい。音楽を通して祖先とのコミュニケーションを図り、お年寄りから乳幼児まで集合し、先祖とのふれあいや家族間の親密意識を強化しているのである。

③〈結願祭（キツイガン）〉

八重山の儀礼信仰の一つである〈結願祭〉は、諸々の祈願の総まとめ的な性格を持ち、諸結願の終結を意味する願解きの儀礼でもある。八重山の各地域で毎年行われているものや、数年ごとに実施されるなどまちまちである。

小浜島の結願祭では、小浜小学校（併置校）の全児童生徒が参加し、進学や就職のため島外で暮らす若者たちも帰郷して、島ぐるみの取り組みとなる。祭りの日が近づくと、毎晩、子どもたちは地域の熟達した大人の教授のもと、踊りや三線、笛、地謡の練習に励

み、本番を迎える。結願祭は三日間挙行され、大人と共に児童生徒一人ひとり、祭りの重要な役割を担っているのである。（次頁写真）学校は積極的に地域の祭りに参加して、地域、家庭とより深く結びついており、学校教育が地域行事を促進する大きな要因になっていることが分かる。

筆者は、一九九四年、小浜島の〈結願祭〉をフィールドワークし論文にまとめたが（4）、十年経過した現在も、島ぐるみの壮大な伝統芸能は、色あせることなく維持されている。

ちなみに、この小浜島はNHK朝の連続テレビで人気を博した「ちゅらさん」のヒロインの故郷である。余談だが、ちゅらさん（愛らしい）は、沖縄本島の方言であり、八重山地域の言語ではない。八重山なら「かいしゃんとかあっぱりしゃん」と言うところだろうか。

まちおこしと伝統行事

〈盆アングマ〉、〈十六日祭〉、〈結願祭〉の事例からわかるように、

地域行事に子どもたちが関わっている実際を見てみると、①日常生活で自然に参加意識が育まれている ②世代間の繋がりが濃厚である ③学校、地域、家庭が積極的
に子どもたちを参加させている ④
④ 共同体意識が強く伝統文化を重んじる、など子どもたちが地域行事に参加しやすい環境と土壌のあ
ることがわかる。

そして、伝統文化や音楽活動の体験の中で、地域の人々と親族、家族とのさまざまな世代と関わり、人間関係を育んでいる。

子どもたちが地域行事に参加することで、伝統芸能の音楽文化に触れ、人との関わり合いを構築し、
「まちおこし」の底辺を支えているのである。どの学校にも子どもたちを参加させるシステムがあるわけではないが、土壌はしっかりとあるといえるだろう。

「まち」を次世代につなぐために

最近、八重山諸島を訪れる観光客は飛躍的に増加しており、平成十六年度の入域観光客数は

七二五、七七七人、観光消費額四九九億円である。(5)旅行者の傾向としては、沖縄ブームや特別なものではなく、生活、余暇の過ごし方など(いわゆるスローライフ的なものも含め)、従来の物見遊山的な観光とは違ったものが、沖縄旅行に期待されていると聞く。沖縄の美しい自然や生物との触れ合い、歴史・文化の耳目に触れるなど、自然環境や人的交流を目的とした内容に関心が年々高まっている、と観光事業関係者は分析しているようだ。

その地域の豊かな伝統行事をま
ちづくりに活用するためには、行政や民間が地域や学校を巻き込んで、意識的に子どもたちの参加機会を促進する必要がある、「振興」の内実を、今一度検討して見るこ
とが重要だろうと思う。

子どもたちの地域行事参加への積極的な後押しは、「まち」を次世代にパトシリレーすることであり、それこそが「まちおこし」の原点なのである。

「小浜島の結願祭」子どもたちは祭りに参加し、多彩な伝統芸能を演じる



- (1) 石垣市役所市民課(四六、五八四八) 竹富町役場住民福祉課(四、〇五一八) 与那国町役場総務財政課(一、七五二八)
- (2) 日本大百科全書(4) 小学館(二頁参照)
- (3) 八重山歌謡の形態で祭式歌謡や労働歌をさす
- (4) 大山伸子「学校教育における郷土音楽学習のあり方―八重山の小・中・高校と地域社会の関わりを通して―」沖縄県立芸術大学紀要第三号、平成七年
- (5) 沖縄県企画開発部調べ
- 参考文献
- 宮城文「八重山生活誌」沖縄タイムス社、一九八二年
- 沖繩大百科事典上・中・下 沖縄タイムス社、一九八二年
- 喜舎場水駒「八重山島民話誌」郷土研究社、大正十三年
- 取材協力 太田静男さん 西表繁さん 桃原用吉さん
- 写真撮影 ①二〇〇四・八・二九 ②二〇〇五・二・二四 ③一九九四・二・二〇